研究の成果

ウメの着果程度と樹体形質、生理落果等

適正着果で、毎年、安定生産

はじめに

ウメの主要品種である‘南高’は自家不結実性で、他品種の花粉（受粉樹の花粉）により受粉されて受精しないと結実しない。受精していない果実は４月中頃に落果する。受精の程度により、ほとんどの果実が落果してしまうこともあり、また着花数の50％以上もの果実が結実することもある。

ここでは、‘南高’の７年生若木を用いて、この不受精果落果終了後の果実数の多い樹と少ない樹について、その後の生理的落果等に及ぼす影響を調査した。１年間の調査結果であるがその概要を紹介する。

１．調査方法

不受精果落果終了後の各樹の着果程度により１．過多区２．多区３．少区及び着果の多い樹を摘果した４．摘果区（各２樹）を設けて、新梢発生程度、果実肥大、生理的落果、収穫量等を調査した。

２．調査結果

着果過多区では、新梢（結果枝及び発育枝）の発生が少なく、葉面積は11.7㎠で、最も大きい少区に比べて20％程度小さかった（図１）。

果実肥大は、少区＞摘果区＞多区＞過多区の順で、肥大の最もよい少区の果径（縦径）は、過多区に比べて収穫期には５㎜大きかった（図２）。生理的落果は、過多区＞多区＞少区＞摘果区の順で、過多区と多区は、他の区に比べて果数で２倍前後多く落果した。また、摘果により生理的各果は少なくなった（図３）。

収穫量は、多区＞摘果区＞過多区＞少区の順であった（図４）。結実の多過ぎた過多区は、生理的落果が多くなり収穫量が少なかった。。この場合に、早期摘果することにより、生理的落果が少なく、果実肥大がよくなり収穫量が多くなる傾向がみられた。

おわりに

ウメは永年作物である。その年だけでなく、栽培期間を通じて収穫量を多くする結実管理が必要である。ウメの適正着果量をどう把握するかがこれからの研究課題である。

（園芸部　原野　博実）

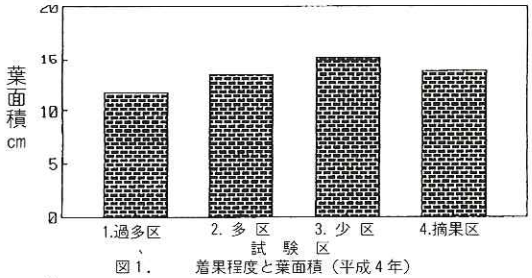

図１．　着果程度と葉面積（平成４年）

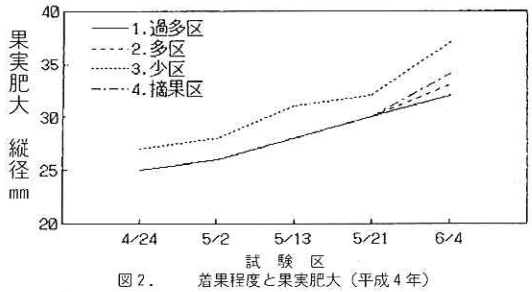

図２．　着果程度と果実肥大（平成４年）

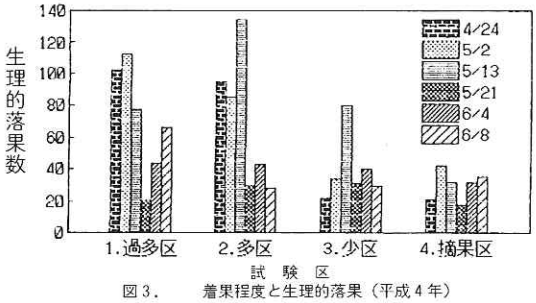

図３．　着果程度と生理的落果（平成４年）

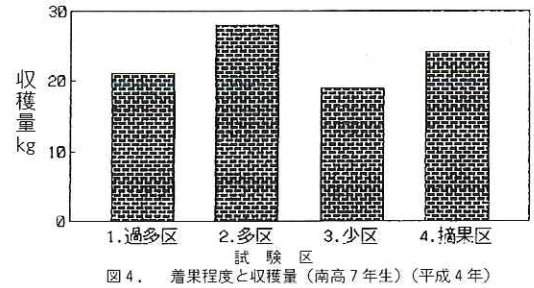

図４．　着果程度と収穫量（南高７年生）（平成４年）

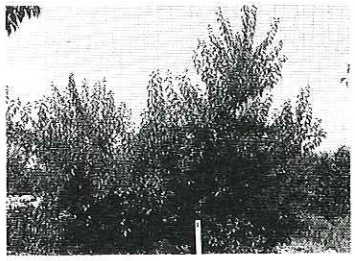
写真１　摘果区

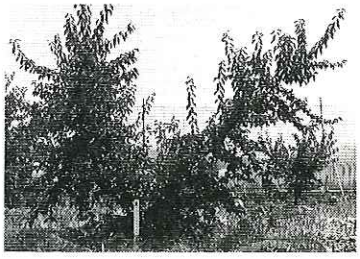
写真２　着果過多区